





卷之三



爲堯愚言卷之三十一

六府第五上

伊賀小臣誠也辟國謹工疏

治本上

文六也能萬物をゆく能萬物を養ふ者也則土地の子を謂古也六工人
より下傳兆民に至るもく汝に爲事を出るを能ひてゆきにかく居りて承し
おも食を給まつて古也、廣大博厚にして平土山玉水大川が今ち三土又廣大
皆廣げく地体をう地城の又疆理の疆界せきハ治め社一疆界をすに又人居
に宜き所あつ本居に宜き所あつ水居に宜き所あつ敷居に宜き所あつ品て
匠別志と治本居と云故に堯舜の際た伯禹司空も天下の水を治め
居後とあく食事方稼穡を治め伯禹虞とある天下乃本居乃山林を治め三
名を功を成て天下乃本居遺不ぞ治ふ伯禹も水地周棄、食土伯禹のふ



廿二年秋の終に六府の治水治火治金治本ハ先にちに論をく山本
かと改まうるには篇ハ伯烏ア治エソト治教、肩棄の食田を而ヒ六府の治
夏を烏秀ア法セ奉セモ推及シテ教訓ア因革引シテ周にひく詳
悉や周至六卿六臣を天せ時に分立せ治セシ下の治教ハ地官也
卿ア職也に治セシ教誨也有ハ甚急を高貴にシキ事セ大日尾
セリトをかのほがとハ君邦化邦のものちく通一治セリト之故
今世ノ治セた見方同く周制ア封建也開八州邦畿ハセ諸州ア
封セラル大名を主國を治ミハ則邦國は矣也枢要地イ封セラル也
枝及び四臣ア名は周の齊魯晋鄭ぢらう加其外越希少也始め松平
氏半落代の大オ十萬石左右小方萬石千石左右の士卒は主に茅士也
邑に接シ民セ守シハ禁内王アマオニ三公の大都小ち卿ナ主ア族邑賜田

乃や又普請を行ひ自目もた居曲輪以外を知武家也を治め所を行
江戸市中を治め寺社奉行也勅使奉行を西より江戸入和也治め郡代
郡代たはシハ猶太卿也遂ア治セサスを國に小身萬石半唐令セ
半進半退入信王阿ムハシノ附庸に以テ日本簡く治方ムセシヒ封建ア
制辛ハ今ハ時たニ載ホ名も宇宙に冠冕ナリト謂ナリ如比神制ア
中く彌進セハ亮昇入治モ成周ノ事も室谷新ト谓シヤ然也名地藏ア
官人同位同等行ヒ大司馬乃如ヒ西店モくやく中の中の支配ナリ是の遠
懺と度古ハ功勳也を行ひ外寺社取ヒテ行ヒ總也之店を菟
中乃由也く一人に承らばひテ一丈六也行ヒ是近入諸奉行ハ多也也
多屬を以シ殿輔族府史胥也トモウミハ主也若也ト稱イ主也一匡章
因方地制セ有也に因也ハ地賦行ヒ教官也其属小也地藏ア以下豪傑也

牛宿を西治地をあらにあらより教訓をことどるありやハ活潑をもるあり
而くも知れ一區城をうち區城を分りにかへて庶民人室乃もり三方のをせ
なまくノ日を立宿名をからそ卑と辨職掌を命に六職入序に心に准王建
國辨方正位設宿令職以為民極と謂建國主の國体を日至入景天ます
本中にまわた謂周の治邑是の辨方ハ東西南北の方角を辨りしる也正位分宗廟
社稷宮室朝市門闈の委位た西もや而くハ中門入左に守廟へ位を守右に
社稷の位を正一内分治れ三朝を王宮の前面に置朝是ノ昏ノ三市を玉朝左
臣面に至つてはまた職掌を正極ハ右のとく國体を建立一等を明辨、宗
廟社稷朝市への位を正後主年に事た執太山臣の居下す文廟を設け
玉の輔佐ヲ正くをみ階を施すねるハヨモテトキアリ北辰の中枢に協めて名
を立たんが爲めに結構として謂ゆ区城を分り、玉築五里方五百里や置

玉築の内百里り、也因に区城を正ヨリ体ノ容る所ニテうち城外は郊もく
十里を郊近方をた一園、郊がを甸と云一園玉体を左をとる所の地也公邑ハ
公邑ハ今之游耕所や甸外を稍と云一園玉城を左をとる所を由ル地也本邑傳
赤色、大夫入採地也今之萬石左右如行也、稍外を縣と云一園玉体を差
て四百里内に也小矣、小矣、卿入采地也今聞八州も大名城外ノ領合也如
一縣外を畠とも一園玉城を左て百里玉築と方國と畠界の地也大名
也太名公入米色也今寧公名財八千石城外ノ領合の如一些三國の由ヨリ入才
を觀識た以て食邑を名殺、もと觀なる玉ノ伯村又王ノ田母井と左玉
也ハ公地小同け共ハ畠地を食む其次なる共伯の地也同け共ハ縣地を食
む弘次有者ハ大夫入地也、也け共は積化を食む大夫の家色ハ二十石を左すハ方
十石半也ハ入少者ハ千里なまハ方面二十石をハ公入大夫ハ方を左とハ方面二十

里や在に三國の三等采地をば多也ハ皆公邑也凡に人のせん故ニモ國を徳と計
きハ王政直地也さた公卿也ノを主にしたる遂ニ公卿矣の采地を志敵と謂ひ
邦畿千里の國中の郊甸稍縣畠ノニ邑也ヨリ陪封樹澤酒を設け封へ
意を蒙り己匠の王也公卿也遂公邑也ノ帰ハ王城也るヤモ郊の地也ソ
郊畠地也る所三百里の百也謂公邑ハ先國に外ニ天子の田を謂方敵私
也也而之樂の飲も御也遂ハ御私乃ち也銀ハ人た民とも夫婦を御ども家
をはとには長を主トすアモニ千を間と御間背を室中也ニ間石名を
族と氏族師を室上士やる族モ有家也堂とニ堂主を室下大丈やる主ニ千
百家た州と庶州長を室中主モヤス州萬二千を有家也堂主を室下大丈
乃卿也主を總也公卿老公三人を室居三卿を分治也遂ハ人を役と云夫婦を原
キニ主を隣也卿長を室主命也モ隣二十石を有家也里屋を室下吉

量百畠也鄰と云卿長を室中主モ卿也主を鄰と云卿長を室上士也
御ニ主を有家也縣と云縣主を室下主也ニ縣萬二千を有家也堂主
を室中主也之を總也遂ハ人中主二人を置めニ遂セ分治を常ニ遂師下
主主人主ニ云く一通今に或其治を督く又ス畿外に邦國を主ハ公候伯
子男の主を設け君に以て食封を大也公の封疆方二万石其食者は候主方四百
里其食者主二伯公方三石其食者候主子公方二万石其食者候主二男公方
八石其食者主一基食者トハ自食也也トハ自食也也トハ自食也也トハ自食也
也トハ自食也也トハ自食也也トハ自食也也トハ自食也也トハ自食也也ト
魯故に山西附庸を賜ひ龜紫を左主ト遼寧以北川右主也公海海唇に也主
也主紫也且左封域之件を社稷也臣主為往見魯也國公の主を以て今主
疆の内也并セ山川太祖也庸と云脇ひて天主にへましも主ハ封疆四万石主

おなづ今事はるにてゐて入ひきをむかへたを隠き金二万五千を食ひて居て
石を食ひ三万の匁ばかりを食ひ二万を入るべ三千を食ひるを爲
ニテモ主あた食ひて一歳も肉を食ひ二万を入るべ三十を食ひるを爲
室入公ちよひ姑射武乃時ふ即ち稱ひるに能く且是代は後小國くさるの
対疆りて地を齊魯も侯爵也古に古大もを譽すと侯國を大國
トク者と云伯を次國七十里の國を以て三十の國と云號が前
天下を九鼎とく御ふ中國を立官吏を立つて界を割一職者を率五方の大梗に以
乃遠近を立つて國を立官吏を立つて界を割一職者を率五方の大梗に以
不まく今の地儀を強化したてて立官吏を立つて界を割一職者を率五方の大梗に以
一日地経先天を載る地牛を乞め方角を一度みを測り三度を等一徑

緯を立升降を度一山川を裏め不順行三カた緯一州里を割一道役を
作り云かを通一地役を仙て三カた卑卑の地を緯ひ立さん井丘陵
墳行の路を云卑八門溝船右溝洫左溝洫の水を平八國邑人を耕田
蔬果を育て平陸德を以て耕す一時に中入たりあらわせ日入耕年入
熟を度て西行一時に北之度數を一州一郡無に測量一風力寒暑を計
次に土の色の葉の枝全植壤を計一貢賦を上供す一植物物也乃生長を計
一次に布の種類の緒を計を立其法を戸をよそ一六十を一所と
所を一里とし南北道路五丈六升を度一水を名とす一平卑小川を計
一州年に度て其州の水を度す一時に此邦の全数を計一州里の取引を
圖明一時に州里を割制す其法は伐木に水の川を境とする又しき

八州を制一州中に今ハニニ十三國を制ヒノ郡を制郡中に宅有
諸中ヒノ庄ナシ庄中ヒノ村ナシ村中に里ナシ里中に席ナシ席中ヒノ宅ナシ
一家入居ヤモ畠を庭クモカヒシテ中納ヒモハセモ又畠ヒモ畠の分田賈
草木を満ナシナミハ民居ラキナシヒニモ其を免モ人良一农の二口ナリ五六十家
乃キ生活五石代ニ限ヤ一町の地ニ家有する家有地を一町ナリ三十石
三石ナリ六町の方に一里ノ民三千余生活在ト一里を村セ一石家行る村を
庄ナシ三石家行る庄を株とスニモナリ海路食の地アヒモ畠尾地
窓ナシハ國モナリヨリスバニ郡を今ノ國と云ハ次國也云ニ郡を今ノ國
と云ハ大國也七八國を今ノ州セ一里ナセ三百余國に制一日一國の量是

之食也皇帝謂治國情に足ナキ法ナシ宅隣里村庄縣郡國州
乃大制也ナリ一次に達遠海道山谷を分ナ大中川出を以テ次に日本ノ
裔八洲に亘る萬國の崎嶇あるをもアキハジの山没をモ既ニ之地也化
易也ソシテ村人を立地致入國移セテモ山水ノ二國移古寧一地也
水治本治也に分離一平古の國移ハ山波に化シモテをモアヒ地也モ
キテハ名ナシモ延年也モ治出の職ナシに至ルト能シテハ矣ト日和ノ乃ニ
明國一ノ庄也アリ下ノ地をウニノ村中ノ長治ナシト然るに日和の乃ニ
少古ヒ治地ノ廣狭に因リテ名ナシ民ナスモアヒモ地ノ庄移モ敷ナシモ
泰漢ノ後北の廣狭に因リテ名ナシ民ナスモアヒモ地ノ庄移モ敷ナシモ
謂モセヒ地ノ庄移ナヘタナシモト室ナシ唯公私移入の移セテモ石室セ
云シテ開ス必シ敷田ナシトシナム也此之皆敷田に立ト庄移也

を當てる様ひて云ひ止むの如きハ承。尚代々數を以て奉漢ハ人を以て國を
地を多入三裏と云教へに此生へ生れん人、地を收き合若りに此地を以て比人を多く
此人多く此教徒を以て終々その制を有し地をめぐらし治るに如ひずを以て之を治む者を下
小此法は少しあつて難る。アキハ唯此意を有して治む者を下

而今藏治太歲の如き入法小國も三花も中方角度の三壤種錦升降前
取多州里を牧事外の十二職を分ち山川より八支を繰セテ左府右府を定め
毛色務をうら武ノ金武を金府に左右一形名以下ノ職を経セテ右を深井
に於く多すを奉セテむれ地を治るノ事務も水かど治めを人民を安へし居
民を守り生業を教へ主富を私方より上役不そく貢賦を拂ひて府内病
下翁多く力済を私家に收めむ。又母妻を苦りを身に以てて苦者
其後た訓導ト風俗を變化して承くを彝德を秉らばる十事にござります。

此成平居民守良教軍勸事公取社を臣庶教化秉彝入十事を治出の天國
守ノ名所入職に限外む道牧ハ今之通津を行開所唐牧師ノ額也見ハ
持管セ一官にまで至る公馬ハ又を詔を行く高官半額半貞州里六合ノ
萬守居大同廿十日付お社財ノ勸事の嘗話を國のまづう下郡代及官
佐役人所レ番城代スハ諸國ノ大名から凡て勅を賜ひたる臣下地治の職也
形名ハヒサ勤宣より承る初行あれば日向國中學地入國務をうら
地治ノ職にか無一時もつて國務より委任の方を曾あらず封人の職を
总角は一四六〇方の外國を治まへてア長治を以て西總管の唐山守を封
守。胡解ハ年後序もう猿狹ね志摩もう御東を属する加さ此が早
に屬一古鴻く并に外國寔末の地治治出はを互をちう多のを總へ
ま一七年に穢多大名を指揮直退一凡外國聘使は本入送迎書信入

事あくをすゝ異國の所臚官典客大行人等入や房總百志文相
豆三浦瀬安の伐塞防禦の子も總國主臣ニ上十二宿八職等ヒノ官不
少官之利害を陳述モト下條入加

三百畠守居西日月景行を行シ羅ハ 店城陣営医郎等毛宗廟社
稷山鬼神人民入店地を掌るに 二方序中儀を以テ京樂役は國の吉備
禁裏仙洞并に大名ノ兵隊陣也江戸ノ諸用處役後也大名拜候を敬
きの創國及び 上方ノ宗廟カ又ヨリ久能上村芝居町社也天入創國を化ア
うとも創度を施セ不謂城屋公公院に極々そ國を有スと云けりにモホミハル
而入地を置く本一滿弓ノ瓦に因ミ店城一大方園に穢ヤ店地ノ創た廢ミ矣く掌
乃所轄轉の要に然ミシハ宇入和モ有地ハ宇神ノ古事ニ中を万代の鼻あを岸
攻守方便利た役多下給モ今迄てに大玉行ア新たふ博見屋ノ創化ナシモアリ矣

別に福島にみえアヌ新たふ築体乃ヨリヨリハ此店城至矣ナク古木ノ勝たる
並ハニの御城博麗也と云ひを立敷也而用にシテ又行方ナクヒ色入る
キハ此等を皆モ其甲法者也と云キ此を左なると云ハチタル鉢窓也昔ア
此等窓を以テ冷き宮扇うゆ法也其本入職セヨニモ良也既に江戸のか京
大坂ナク少少因勢移体入すも皆為方に總く築石垣の構造ノ創を以テ居行化
ナムトニテ陳多行隊所アモ一朝ア退ニシテ親御アシホヘ將帥を出モテ
財入候ノ奉侍方御行六金創化堅固をあまノ法善く生辰に無式國改モテ
モ時ニ移想モアヒニ又大名の博麗也和モ人ニあさるハ語と理也一皆上の名ア
國をもつ民をあんぞる内に設シ体も障シヤウトヒトヲ切付ハラヒノ御也
是も既ヒモ翁國を可く上逸のノ人皆其内に施シテ一也モ大名の包敵ハ上
才トの三所を経ケタ大ちる多氣は源氏者也包敵を許サモ一人にくるチヤドモ

有りまく序傳下甚く泥鰌とせ用に食田人屋を訪る行ひとゆゑ
彦府宿舎入室にて御宿すと申す。旨明原やあそばれハ皆御家風を設
めテ又スハ主君を甘んじて御宿に江戸に至り奉まセハ以て主君也モせく立
乃御者之々とく御う事華はを語のりとんへりて新令りく古屋也
モ而處て御事と申す御家の家風を尋ねておほい定前更着入門を候し
御宿御宿の名を何居御うと云御行持御事ハ但所何様何様と云御持を
立之に重く地をあると見入化而に宝きる御事御宿御事御事御事御事
へ向マ一もタス時に序傳三千余年アリの事を勧め大少不ハモ元サチ
も親り居らるるに因一もく守備令等と申す。御行持御井田御厨を
底ナタ吉慶船ハ久世高田正旗船ハ秋元或ハ虎乃門ハ田辰三浦新太郎ハ重慶也

井手移、松年甲斐守溝口守志候ハ松年山内守倉速、井手源氏民マツシハ松年
源政也移正守志候だと云ふくそ竹の前後めかに邸もあるべ、云川、ノモ命セラ
坐ハ今のかく唐に云所く承る所を云く承る所を云く承る所を云く承る所を云く承
坐ト一也くつむを承る所を云く承る所を云く承る所を云く承る所を云く承
潤ナ泥鰌を免まシ或ハ火消の力也。序成道守を角ミ火消立木に是橋本源
を立テはづくハ江戸中治り火消の事を述き且六数歳を度て火消立木に是橋本源
今ノ御家主くやさりアラ御安達御事より、工方大臣た厚儀一もてす勤務を
属のもの役なまく、伏き心むづく御川の湯也ヨリ山也水ハモキモキハ相川
江の崎道金武州金澤守ヘ太に花園を用つモ、御時ニ次第を多く御教へ

告を賜りテ波所にはく上方花園中に然ニ大名安東ノ聲勢を威すやう
モハ天孫の氣色に因ミハ今のかく大かく大の聲勢を有テ終りを安東也入
後園別荘を廻リ禍事を乞うておほむらの活計たちに就業きて且かにひ
テも考傳を思ひモハ涼山を詣すとてはの活計をとくニテ未
不察の大名以彦を從ふくまに改教に付うきハ萬葉の名も難免の事を行
く乃只徳と名稱一まん是にと七名へやを深見安藤に於てよらまこと
坐ま然むちく御徳を嘗テおのづかに二度後に限るとちくは波モ其をを
聞たる者き家富ハすらも自ら歎く後仲久氏の洋色三者を嘗みて曰く入
海すアヌキを本を詔すの際と謂ふ也ト士方正家ハ厚生にやはて今此
番魚が言語皆を波す江戸の番からハ一組とに一縦とせらきハ大に船
む上に役金三日のあくハ赤体直に波筋とてほく波急モハカオの主急幸
む

御利をひだ一そにこび彦わ入士入を欲も江戸に至る者今の十から十五を船で
舟一隻八人を載ハ向きて厚生にやまとく所を安土城主のものにやまく太
に一組一組に成く輕き若井用舟を降下し其處は地名ト大名曰庄も或へ
乃加安國山山又う名大内官へ武を送り彼官に汝子を出因とは曰せば某
明向と次に因ふ入 宋廟ハ仁義の目を之能ひやまと上野を守り又
寺ハ因寢後廟とく伊豆善入也又墓地ぢまきも大和の五井半モ其
孟く波十寺入後山に波の房うめ大名以彦を从ふくまに波晏志波泉晏
地を波入又三寺に波りヨガ波晏志波あまをかくふり波晏志波泉晏
三院を守り又三寺に波りヨガ波晏志波あまをかくふり波晏志波泉晏

江ノ葬地にて角川所に奉祀元清古寺一福山加く江戸中大いに
法事をうち是名也葬を以てまく生とハ君に事死とハ君主を十宇を
に龜巣を以て復一をもて禮ちりをむかへ自ら其の生の事を除て一又民入葬地
右八十キの溝通を別ける外側に木下市井六市の法に因て聚り葬
りやがて是もまた、君の市に因て同郡同姓を相承へてハ君の葬地小因門
同郡同姓同世の龜とねばりを以て、爲家溝原の姓を志す下に之れに接
上六表仰葬穴入るを以て、即ち方を御地溝通の事とすり下ハ臣民の葬地
葬式乃ひ之を施せしを職人也江岸の社稷を山主神田入山主を柱と
神田を禮モ一其神を遷入をして主社稷を祭りより神を之に祀事を行つ且
諸所に散祠せる大神社をもまく其神の名號を以て之を神田の舊
湯宿で神主を有する事無事也不主於祭事入ハケレ一遠事して一縛に

福めをかねてよりあつた是ハ近民の事に中には民官満洲の計を祀にせば
満洲に西番神社を謂にて満洲人如其ハ波羅廟にやにみるにそりむ下是は
江戸ノ社稷宗廟玉帝臣邸因寢苑固陵主の御書ひ東洋も亦法事の
考究多は之に效くと地職をもてて大にをみほりと謂ひ

昌平年行は藏ハ天下工商皆入民店也之ニ
津城下四圍ノ市中を活シ
市井ノ金屬をうそりモテ爲を立モシ布を服飾一毛弛ムを譲レ小織小
訟を聽ク及一其法ニ高閭良厚生篇ニ序に如く津の二商ノを南北左
右にちち名を爲毛を割レ毛みを能ヘニ貳ハ江戸の褐ニニキムを割レ
掌前間ツ立掌間み甚極を策キ溝通を掘リ開つに由キハ出合
て其と云云に奉行ハ久松貞也ニテ家代モ行ヒアホミシテ居長
毛乃木六多々や老ハ郭翁乃庄アニ老や老ハ毛子也老ハ毛子也

又百束に又むべし長更さり矣ハシアキ行ひ被ふものあやせと大凶難を
考ふ未ハ此の因つたれやと古民詳ニを盛憚に省勞ハ意闇に居す
因つて間つたまうオ上頭門にホーリマ下尾つにホー上段入次つにホーを居
モトモ床門は改被安モ代の丸石モ一章の中からおもて方木代の丸石を居す
皆の如くも章の正向ツジ解取御所代の丸石用ひ十章入跡行ツル松
山善信のま行ツ腰物は簾簷施等のま行ツ酒戸以入松を角う見ハシ
五林入ス方多カに因くもく本多モハ松地の山善信を用ひ多く金ニ至る
ハ松地也腰も改奥足を用ひテテ後苦工の時ま行に總ゆく江戸の工兵の
治地也と謂左一古ハ國中ハ云々を以て下士人ニテ長テ二千石家を閑と
中士三ツ也か始て尼古うめと證もと將と古制乃かくは間入長に命士を角
ウミテ松木と引代をなしてヒアヤ行え表てそんび入れたとニ食の法

敷を處く名オ一尾を表す拂拂を賜う従科モ一二十石余長の家宅には宅地を
主候ト右家長ノリヨシ之宿の宅地等す上二口入替合を賜フタ一尾を
経に松なる民と證も上口出役科リのほもひちるスハ波多もきく平民也
猶民モ今日に累々ぬれ給候た一セア名ミハ家地也と云民の給金を云
古モハ又家地也云入役科リのほもひちるスハ波多もきく平民也
古利に因と移らましまく之のれニテニテ六川付を角に立高を平モハ松地也
林運也に便く又林の立高立高を立高地とも立高く立高モハ刻骨もテ
に在る集の如ク一商民ハ江ア市中に於テ立高地也の處を立高を立高
松也三河町吉野橋也立高を立高也立高也立高也立高也立高也立高也立高
鍋子尾法也立高也立高也立高也立高也立高也立高也立高也立高也立高也

つを志後もひまをひて市原柳町牛の山を牛の
第五志後も石門の近少川草野町水を橋を左側筋筋通す下谷
湯河源をかくを済みと行とちやくやつ筋を中筋と定め左右（縦筋）も
町地を廻り周の差筋を追け計萬溝通を制 そ見る、正月五日師
元年正月二日正月長萬二千百本長と考えま入制のとる安長八戸
後をかうニモ正月八疋布をかう立原師ハ市役をかうモテ多々、物役を
取りニモ正月長ハ内を鉢一市役に入るとたすきふ口幸後ハ高良の口あを
追ひ一人別に脚くら継ぐと上方住役に充當を法男ハ女に三倍二倍と民入
と故に因と創を立つ男あはく一年ハ大後川口女ハ少後川二年ハ男ハ後女ニ後
三毛口男十二後女三後口女ハ大後で除そま三十後五後とモハ二十四後口後七毛
元後七後生女を延べ十五年におり男子、年後せふ、十子後を過れ移す、之を弛

余次ををひを極むと謂唯其ノ久をみをたす事年、ナムナム四十一年
大徳二年を擇て事ハ五十までや後ニキを國に皆魔病を犯す事年五十四
事モ十十九死にあすく留ハ大徳前天、少徳元を擇て御宿禰を犯す事年五十五
是を少佐た御名と云はば白蓮法有り勅せんと御本に因るの初也セ
因ハ築綾義の上りを以て大徳二年を上りて老を以て既に半
歳前を山家と云ふ事みえに渾に塵に塵ゆ、今の大徳や常民の也歟
入内院内人信五と信らす所とを尊土入肥瘠に序、之仁を上り
モ亦ハ山石にのみ上苑にされス、以爲人能ひてさらき、ヒ入地セ
か無不^レく室あつて、一市役、今之市役をう若人や高麗滑林東
の多寛に至るる一ノ役を歴シ、一物役ハ今之口物口役と謂うや、管
十^レ一を御主、永車牛^レ力五手のを物とはひれ、強も

お急ぎ御へ大中筋一束下革一筋でも何を何よりの費用を負ふ
をかう承へ行方を尋ねて納るとえりてお車に立あらま下革ハ今車の
車や斗一尺も一匹の船牛ハモニ三万革絞馬ハ三万革を過す下物をされ
皆で侍に一筋、用ひとひ止制を施せば其法やとのを、行の五日後未だ
纏き立ませうたをちに御あくは平内下市屋の御もい又革牛るの行
あにも途立ちかく肉公旦のをちるを、微多めるに後世へ傳來を今は
差に時くたかく流入武帝高車被革をもたらすと、是を以て聚斂
をも利するたに傍ると御方々武帝を利する則ち因てを利する因れど
に國中乃ひ之郊し、民ニ高之故以淳厚力也爲多みく、當時微々たる所
故ハ高車輦の數を年とと御知辨を年六倍を御多く唯をハモニ

算事より、諸事を了すには、猶豫無く、(用事)を承らるゝも亦然
天下の商賈り、此勘定を済ませ、軍國へ用に充てておつゝ事も、とぞたく
衆鶴と御居たまはれ、決以て、良鄰戸の地法又あくまことに、ひうや、波打角を
毛多所た治むた。江戸町まで行の地法を守くは、國の町を紹介するは甚だ
力所あるもの、はむ下に、市中の織工、商人等と、時々に歩て、ちぢみの町
を行く。其處に、紹介所として、あるが、行かず、諭示刑罰をばうる。

そ曰寺社を行ひ嚴を上ち御體のみをし 内宿あひものにて 御舞地に歸
下へ天下巣立入寺社地を治もモモ法造民厚生に至りテ又 仰神を祭
天下は國の主也八地に治むモモ法又神厚生は為れか一故に天下て御祀人
鬼乃多詔給うる者を知ゆぬひ延祝うる民也風の里より御國をうりモニ爲
を主モ微欵を享うる青狼を出モハ江小獺を神トナヒシの寺社を行ひ

欽税入職典せしと雖も臣乞免に准ひて此處にも大に金府を主む

爲堯愚言卷之三十一

爲堯愚言卷之三十二

六府牙至下

伊賀小臣城内辟因釐上疏

治土下

杏遠國奉行是六令の京都所司代を貢せし其半二條後城代番財在
竹林裏仙洞附大坂後城代番財を行後向ノ博代喬財を行甲府勤番
支配長湯ま行体液を行山田ま行日光ま行素良櫻浦貨等のま行を
謂也唐城内た治石方江戸江戸當局^店善詔ま行せ同村の法を文城外市中を
治るハ江戸町を行の法を文寺社造西入地を治石江戸ち社を行の法を文
田野ア城を治石江戸江戸勤乞ま行の法を文道役門閑ハ江戸道牛ま
行法を美た方江戸浴池四門の害す若を存くヒ職を主事
七回領主他以今世幕石江戸むる大久の治石五領かと謂も主を領

とて大國は古の領地をもつて領主の封地や下級の領主の治管
下を知り得地と謂ふて代地附と云ふが、其の内に屬する旗
衆人古の王朝人士を支承にヨリ人を稱する者也。又曰附
邑或は賜田宿田入等上う土地人民に賜り上代にも土地人民を治
すが、又は敷役、民法等既に己へ歛方田を又上へ穀貢一束
内入臣等を差し臣等を神ひく外にと君主にな一内田を又是を主の藏
分也。古の國は封國を元に大國、またを首一坐を自食。次國、三分の一を
食之小國、二分之一を食之。又三分の二、又三分の三、又三分の四、又三分の五
祁門に至る者又は之れの倉庫にうする者と謂ふ。属小國の臣下に至る天子へ今
度貢とみ地と原はるに今の大國は法矢豆方石八人三十石を食之五十石
を附庸にうち貢物に用ひ、たゞ度量を眼前へと上へ置くと異ひむ

た。伏見の城主を有する封臣に在る名守川の直隸貢使に物資を送て貢
制に従事した。今の大名に因に起きたが、初善法水火に傍まよ清を序
せりま不とくに奉ちを仰ければ、産する正直を人へて清とあを也行ひて此
處に淳むらあをもとしむ。是のを多岐御事すと、もと入官事に
附れど、年々と進みて、とも遼りて、もとに、後、御用取扱ひ
所に入金幕役情りて、万に合せられ、有利を以て之を進み、之後に、費一量、三利
不直官と正直入と改め、領分を成せ考へて、清方役となり、即令も行
の若少役ゆく。國家の入玄式を泥らずに回りて、そのがた因定せりむる。
左ハ大名の國三省を治つまく清とあを石川に、民を憚じ入そむく
いふと嘗て、知れりうむと、そあを在る國と、統治法と、軍賦入
金額を出そむく、主はめをアリ、不主を多くお主入間ド、一主を年

也非多乃拂々と上方廩府に納ひた。大吉治地、博毛の西へ江戸ノ脇筋
改善法を以て前日入法を文附下市中ハ戸町まで法を又ち社邊地
の地を沿ひ江戸ち社まで法を又田代へ地を沿ひ江戸ヲ勅定を行ひ
貢役入治に密しを取つ間を沿ひ江戸まで行の法を候ひたる上
モ御官入害がれ方々多くを地法をまもて一凡の也大名の國ふすより
たち公邑ありハ並領でと云を居きよ大名モ花人民を保ふゆく法のほ
毛地主を公府へ承ひ口通ふて云をもむの太名(賜り)大名ハ口承ふた
坐家臣に仰そゆ松まもるやうせせき 縣官の役者を行く古制にて
三とすく官吏ハ並勅定する所をめもめをかねて大名を云君と云う是而て不候
人民ハ云色立ち云をもるを云候らう大名を云君と云う是而て不候
民心を失ひて云を入用ひて浮立ひ甚く危殆入るやうを知る。

三韓流隣の賦貢せれりアカキモキモアシムアシムヘキモハ監禁ハソクガヨウモ
まわるの序料不至に及爲候立つはリ一左名モ前モ遠にナリ上六代た
士地ノ民たをゆるを勿論此がヘソウ故にノム取ふはき地主ノ則チ賜つて
九領の名を傳に領をひりと云ふモ西京前にも法ノ如くをもれ置
た一凡の者其の多に今之の法領不役たるハ又食不至キと申うるアリ承代官先
或ハ三年多空免多タダノ賄賂を詐半不役を容れシと雖然を年名
トテ昔いもかび初官多大名ノ賄賂を詐半不役を容れシと雖然を年名
周詔セシ領分地所居傳管を引替ひトナリモ因替にナリハ故に是
式ハ極めて嘆古の地をもとに初うなれヌシ石首尾の人々ニミ川ニシテ其告
夫ニ付はヌく國事ナリヨギヒニモ周の世事ナリキニ一改封建一之。

公車入之省官也も移転す。至幕、方孝廉方公、地主翁古法考、知事ハ
有司を率て之處を實地調査を執る。古法考が御内閣入國後も音信なし
下支(芳敷入君)アマモト正六卿士と哲生政改に秀郷の移封を承りて詔
アモト太田國珍、改此じめひし不毛尾久人、地を利らざりに定め、老民少人
地を充肥せ(秋に苗をうそす)。此名所畠入先に望十載人物盡せ、棄土と云
て者多く、今碑に「江守をもあた罪」と云ふ。老民に及ぶに劣ひ玉
之又北側にやはゆく印三本立つて、村四ヶ辻を廻る。西ノ原に
御馬所櫓、秘策院院門、進見を妨げず。

八回過牧牛藏方そハ今ノ七月廿九日未申午時せそ年東行と云先也牧之
乃牧牛藏也う方沙山也既於もたは源ノ持モミツ牛ハ毛色毛色模も
皆闇の毛色、落葉色也毛色年入牛に毛色也一過源也水也源也解也毛色

凡そ三年の歳ををまわに十の月を一通経ては店舗とせんと改
ちて中路中をかみを御通間りて先程へ取あを下江戸よりおち里へを度
ても直前外の数と程多きを識、三度の蜀石をめ（皆因移り）
モ二律道を改め精を以ての相思を立ち下を因藉りを極黒煙を起る
てをかねて三門閣を抜け山へを涉り、之程を過ぐるを廬宿市を渡り
旅人に候え良を言ひてこそ傳郵を重く云ひて旅行を起て今お宿
雲ゆて嘯歌を詠じてから翁行を出でる事へ廻東于役に至りひれど
旅をすりちに旅承旅笠と旅枕を覺えても間へ乞に道宿の爲立
廬宿入官室に守を立たずと詰の本因をかぎりの少り入法知らずふ
そ候詔國官を辛うと大名の旅宿旅人の宿宿を便にとれ導体を立
てし、上乃心の師田の信宿次に若に千尋れをを銀陵に引合ふ

へ道中入國を辨やめ之の意を憤り罪に入牢を免まつむ

道往と、東海をハ江戸より京大阪にむち正音路ハ江戸より京大阪にむかひま
太そを仰せぬり先裏御甲冑等凡の大きさを云澤筋カツジンの大きさを例に左方三本
トアムと/or三本トアムと/or路入大小に因て制シテ其法人の様尺ニ良馬公尺牛ハ
ナム車丸尺輿六寸大路ハ榜人皆信丈丈にムおなハ十尺とくも澤古
左右の廣さ尺ゆ丈尺を表すに急半に平角と雨雪を澤半に左角ハ
市中を度入れハ皆株の以て澤財入所を経入所を経入所を経入所を経
走く模亘十三間とくニを化ハ國中門前の際及び所れ中に用ひ大きハ
一八牛を筋の五おまえ九官とくも澤ハ左右各五尺深半尺中通ハ根一人を被る事多
強き太父八官とくも澤ハ左右各五尺深半尺中通ハ根一人を被る事多
七尺半とくも澤ハ右左各三尺深半尺中通ハ根一人を被る事多
交え方石すともモ澤ハ左右各三尺深半尺小道ハ一人を被る事多石モ一モ澤
左右各二尺寺澤モスモサモ細毛八唯二人一馬を容れハ一丈二尺官セモ澤ハ左右
各二尺寺澤全に四毛ハ一人一馬を容れハ九尺一尺半とくも澤ハ左右各一尺五寸源
三尺モ宅徑ハ之行毛一丈半とくも澤ハ片澤とぞりあう或ハ半ものや路ハ徑や湯也
男也道ハ緒モ築モかく宅徑ハ之行毛一丈半とくも澤ハ片澤とぞりあう或ハ半ものや路ハ徑や湯也
乃湯も同左ハ天下入道路は戸数ぬれ塗澤を泥一其大堅毛幅十二尺一
等其大堅毛幅二十里一毛半中堅毛幅二尺毛半中堅毛八尺毛入石毛半
坚毛毛半中堅毛一毛半中堅毛毛半中堅毛半中堅毛半中堅毛半中堅毛
十里に大堅毛二十里に少達毛三十里に大堅毛三十里に大堅毛半中堅毛半中堅毛
而名を西毛ハ西毛毛半中堅毛毛半中堅毛半中堅毛半中堅毛半中堅毛半中堅毛半中堅毛

古き雅言を有た一毛を取ふを地名に以て也も何因何節於村入地の下
乃く次を此の小名を立すか行千で行十所何因何節於村の内に至る千
余處に於ては村田地入地に於て實の里みを立す余六村中を計詔
と年は度は是をう徑道を村の田地と實くはモ能て致も傳居仲等
者八人の方は傳りて軍旅者士卒の身侍仰て大に軍事を役り下
又從行のをあらば申そく京へ定むに室む下足をハヘの身役
一ノ日一ノ日を一里とし今三を閑東道と云く因ひて此と定めを聞ふ
之にとく方委附す一ノ木てやたてに一回比尔一里と定む下四尾をよ
及千附半井にく一里と定む五ヶを既に平野に草をくむが是の水
一治水と解すモノ也

一ノ木外は外の急にはかうほや詰毛に吉子はりほり沙をひくをす卑入
行信長経院の石太を廻らる三段ハ橋河経渡院の三井やを宣
所と長江を渡る所を源流をみる源流於源乃は法及び源石乃は水律を
ちぢり一木を治水と定むて格別にすりぬるを西源をうつ源流を諱
一治水と解すモノ也

緯道並にふる株をゑい陽を曲直近をノ山をすり緯道の園筋を參
ち天下郷等入すをすり軍旅四役の先驅を職と貢貢ハ道筋と稱を名
建山を立すと道筋、今之の倚合税乃はくにとを立て取石を標識と
云樹の材石何んと立すを考究入るを沿岸源入尺に即き石碑を立金剛
至たる望人六神に立すを稱すうの入幅ハ陰處に亘り軍船の御用

入道寺一里毎に村を起一上へて山を西へ入る所を建東西もよ各
面へある木石を筋足數箇曲彎直と云を金利とる也今既あせ多賀
城ノ碑の文を考究所と考究所とを考究すて面白に記す店一

門吉國のとくとく縄イ大本戸内爲官に大本戸ヨリの、いくふは後鷹
井戸入口に及んで江戸と同様の疆自ら開けたが爲國中と近郊の
境自ら國のを走らるた一縄之バを法を申すた、今のそ縄が官の大本戸
をかゆ附入と付ひて、至天祝年に至るまじい近郊の後日と此と申す御の
左手をまぐら川を以て大塔板橋筋の戸田入源しに接するをかく一島を
名代房總の方ヒノ中川渡或小室市川金附松戸或ハカ木河の里を有い
之を國つて定め皆そ縄はその大本戸板橋入源月を近遠アハ近郊アツ
六郎達井中川戸田日枝或ハカ木河の里入源口門等ハ近郊の里を近郊ア

國のを建國のを起とすと食糰を取て閑閑をすり出を波一衣服祝幡ヘト
豪様れに方火にまき火を奇形一多尾に信幡を以て一役役と
両刀を腰にさし用ひ去れがハ尾行の民男女坐つるに男ハ大後一ササ割
牛子車ハ大後一ササ割でハ役を納るた一役役ハ背肩に擔負一斗三升載
重る貨物ハ千六役役を取る千六役と取るに至る者ハ役役と名を法と
些二役を多く門闇の要務も門闇の所處及び役所事務の所處に至り候
ヨハ大村に納く天下旅行の旅費に充て一閑ハ閑やを郊の末に設
くた一木に車糰をハ計並川入奉申らそハ熊谷の山モ多良モハ二重松モ多
緒信通年ハ取扱行ほのもの取ハ因富甲君不年ハ小林販賣也多良(ヨリ)、
曰闇に度つやう引廻を捕(是度多良の闇の法)かまに西邊の兵士た等
を云職をくも備前入らや佐常節といも高志所をゆく所をゆく所をゆく

主より是を承入後は外とう考る者ハ多シ、其を重んじては後の方あり。浮屠
まく之を覆つゝも一國の文をも下へ送る事と同算の也。文をもとを草
之をせしむれにせんりうちゆりがハ断を行ひてモ策取引に多く通すも形の改文
た高氏に興へ之を因つに也。國の之を國算に也。やうきをゆゑやも伝
墨より往生への院行信信をぬるや厚く閑じに邸舎もく商場を入主官と
きハチ宿袋物金鶴院を永く坐ち法ぢ里其此古法にわざく内閣の法を
立したそにく園中へ袋物聚散に締合く猪高利多病、亂をり也。終
をかみに余邦ハ沿用や陸にきつ昇を家設立水の昇をきく、其高
乃みに弊苟を地山に以て波水海うむたる下を父治水に將ゆき浦
賀神あり。罔言事降花吏史はあ下。荒川源よ萬湖も内高名入へ水海は
之の開へ於唐院を没出まつて此國のも主數々用開

大々は嘗て氣を挙まへ旅行すとこゝもけり朝一 未だ夕暮れ行のる
宿手をひく波打向所を、今のかたや寄り宿をまつちあひ本ノ中川
高江ニまかんの侍に命一 中巴(三巴)ハみちの侍士をか(主をまちにむけ)
ゆみ絆士を用ひテ まく、ひく筆根今や笛吹きめ甚て拂ひテ えびす
聞(も)うにうちはなか(命せらる)テ 法國の口留夷(ともひとか夷)をや高
いゆひとく、まく筆根の御事初引て、まく筆以てれくを有く法をまどもす
天下八百昇一法にち片

十里に廬行す處、飲食を辦ひま下今の相入宿と云ふ也。三十里了
宿あり、宿多行す處、並敷菊葛笠服事欠きる所（内内名を御とへ
五十三次乃宿なり。三十里に市行す市に移行す處、並敷菊葛笠服事欠
候之者居入め。今ノ品川計多門有源府中大津守ノ親宿と云是也。

此三宿入民、今年な約入支底へも宿事をして是中旅立ても省不致
にほは、村四人えと食じを稅を課せ方ハ年在約に歸るに
傳郵今ハ馬疋の内、鷹や候、後を詔内法へ特清吏れ法とモサ
ミ人ふ今大路百匹石人中路五十五匹三十人を定行う大名下ト古のくまで
まえ日光つゝ木本を上はるものに御とハ、主は法か入人馬を課之官
駿を肥正と大方をへんに法ハ、類貴久と立候とハ、御里正を分一に云
ホウ役等の旅外に法を立法の如きは、御舟六呉舟八、舟外に國法を漏
さん威容を立するに、法等に云ひて、旅外立ち處繫にゆび縛を
御を立せ給て、そ年を申して、御うち玉を給ひて、御者立
坐入出人立せ民を頼入若也青け旅事わ歎とあく日本一の寓居
とありゆに聞を乞ふまづける旅舟やを、家主に之を御守を

人馬牛立病者入時刻を走て手を藏と見ゆ。一毫も以書かざらま、不為
ゆを送りてたゞ併は入具よも遺物よけり。三日掲げて之道宿に注合
乃法と考れ小様へて又お片く道本と將行と繫連みと御事をき
きをも、罪あらず此事に因て、常々を度今とも取所入官へて、若波
支へお府へむ處へ死刑に至るも、ゆう清鄭府、將行へ。今を以て府
何へて有家門の取扱は、延喜至中西行。

將軍家の久馬行役を終る大石原半備下さる云改定入を御承り
暴虐入告使行ちて之に民に宣傳す高に天功行と告げ多賀の望立
乃將行へ陸路行ひ御至ハ多行今を經て辛八度付御宿に歸
今を経て辛八度付御宿に歸
今を経て辛八度付御宿に歸

將行を爲の道宿にやに於くちく今をまつての備備等是事の
如く官を若様とせよと官差を年入の政事にゆきと運ば一と次
之方侍郎宿もぢ然に間隔とあらむ必竟士民の信頼に絶する者に
之如る者有れ入本ふ毎に人を半時區へを寧に半時威と善
異限もぞ下りる人馬を焉か又或ハ物をねて人至にあせ已モ
只病也と餘が死か生かう御たんがりにちまハ後を取く多
人半時内一歩たり或人夫合は候ひ入後おそれが危うキモと前く官
役人を申す者多度と為まにて近づく如く人ろめきを侍郎の宿
まう立入將行職へ波一令家へ將行己うこの死焉か後を取
りせ巳う方ハ而も入人ら客をあく侍郎に押さえ主をもとめか
省を定め上裁乃方となる度く又下部の人足を殺すも五年入をひ陵

備れども、却く是を波自ら済うる年一と半時立方法を半時有
五と不入可也とぞ空助者使ひ人ふ間隔を背とて以侍郎
官長立ちて半時ハ侍郎に立ち

省ハ今八番不の候、附番不從事人不禮と云うや、第八今八緒角
入をなまく、上う賜りて使者の奉公とする意也に至て御一左官令引
たよ此ノ序入二物を御奉り由後うけ一氣つて太刀の御使の官長
學を一々並せ道半今八に、上方八番不從事人不禮を因るハせども
路中等入地を在り方面に當る者にう賜る事半車八入半時八坐て
后庭不從事に及ぶて半車を行ひ年車行ひ年車に立て波を法をあつた
考入は外考法入人も字う立と以て家と人を以て其と更あ無くと渡つ

開乃内かた符節を喰へ候取乃處實至幕を喰へを語乃内かた施章
た等(主相限多く多符を當處に以むは候候人入道候事も此例す
圖式ハ別に白毛水路ちむる者ハ水舟を蒙テ旅民を尋り且自三物を蒙
高賈旅民車か車と旅行せと見きハ毛毛の長老及び親族
当處にやしゆうり通宿に幸く旅衣旅笠旅杖の三物を出く宿村の
印章を乞ひ更名宿を被ふ笠八道政ノ符と衣ハ旅宿の符と枝門符
乃符三種の符とて旅宿入の笠旅冠らばとを語ふ就てを有してお
番事ハ宿次に赴きをゆき候事とてはに三物ハ西海道をか説をとせんと下
必ハ旅行の民ハ懷中書吏軍長ハ旅枕帖あつオカタを食入乞布杖の符
墨々と用を辨むる事なしに一書に三物ハ西海道をか説をとせんと下
章拾引の如くたまら者ハ之を印章にてて書の旅章章ハ民一里半

里ハ旅立を許す故に法司ハ今のかく四民筋を附を國化境干邊
故一式ハ御里を敵毛と曰毛の旅衣遺品を被ふて没半人を數一役者を寂
ミ罪を犯さく化國をとてりんキ 国家ハ搜索する者民也不穢なら
万年ヒテ少少倒火ノ事も本所本居の事とするあるべく

已尚道外大はを乃西海八道乃所ハ中央に道宿の属吏全セ三十里乃
不官を令せ立道官の卒毛を無く中央車馬右男子左女ノ法を守
リ法入ゆりて是を阿朝黎明を終一暮ハ苦勞を陽りと併外を過
一旅行を禁じて不承認と被りて兵杖を執く逐西正とたす
又名多ハ大久毛の官吏以身入送医避諱入と勤めがいを陞資賦年
間を至拂達正名とたすを以て此役不毛ハ道宿乃上私する所と今マ一細故
間毛ハ高氏乃高氏に充ち此度卒乃令を與くら毛を勤むだ一

候館八國に入り大名遣府主印に付立寓宿焉乃館舍を多者に建
立者を年に一回を約つて用ひて一國入領之處は諸國同士寄合く沙門
名高分限にてすゆ家臣を以て互に沙門に傳承乃佈施た解支一山候館
ヨリ多き事の委託阿リシ事其中よりミ君及ひかく中央貢乃用を給大
名高不取益めあらと仰せられか傳云ふ佈施主沙門にて沙門を
夷人小字或ハノ使の官吏あいニホツの詔書乃佈施主ト去つちも
候館八國沙門傳入所アリト大名佈施乃沙門の是事を陽和と
主下モ沙門入室を防げモ行ひ入可トト大名方候館立沙門
主も主内に沙門日畜立沙門は主内沙門人主をのこ因う度々此制
記沙利法則の意治乃法階を度々沙門主に屬すト密或入重敷
或ハナリ急遽乃頭通事の沙門を紹く塔波侯館ノ館中の平院を

用ひて通事主トセ万紀庭商客入七重と申され大名方うや甚之座と次國賓
又國賓の沙門を釋迦の釋迦尼也大國八國官邸官在立沙國八國官乃
とてモ御身ノ一品ニ立川、桂井、木子國、那入者、橘の山川、山田、山元
山元沙門入那國入様毫取シテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
後一官在候主トセテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
所ノモ度に許ヘ許を乃テ後信常主トテテテテテテテテテテテテテテテテ
主常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテテ
信常主ノモテテテテテテ
信常主ノモテテテテテ
信常主ノモテテテテ
信常主ノモテテテ
信常主ノモテテ
信常主ノモ
信常主ノモ

道博上宿日光入　津殊行を駆めす旅の機也有の時　上乃津馬
軍万れ國へゆりてひもあくとまを筋を駆けたる人博とあひ物の母
色路甲東方候を以てもかひえを序へ古河岩根宇都宮守等は是に
道博御之めらを多官隨り滿りては御てに筆記を多く有はば良し
官吏を並ぶ事無き御ふを傳へて名に御付ひ多候矣附（武家を
侍）御用の所用ひよりてに於て餘事法擇を多様ぞ道政備の事
と謂下

辯丸道中旅行に令銀波を齎お一石ヲを辨ちとて候少官も六
旅の三策を計く候事とて極大に比第れを以て主法御酒入
為極を見て化つて所用入物にあらずと宿と所と本との極不行
脅用入物と一宿一晩の旅芳巣入旅館酒の後若僕の旅

牛馬の旅がる處へ後酒來後酒の旅酒の旅門闇の旅酒の
旅御昂の後草鞋の旅兩具入旅度病の旅死僵の旅凡十七日不
可也半物か候く其處と高下多才れ程に危一毛半當宿の宿便
旅の多氣難い事とて旅御、宿何不をもせば一宿一晩猶何十石又
況一度能に何千文官食入旅何役全一人足産官旅牛ふが免の公私廣
徳、何役旅私場移居旅行役の算と行役照差ハ大名守人の旅
をとこよへ立處を以けハ郊外に居て立處を照差田より酒何役半モ
立處半モハ大名守官役（ノ）役酒御名の旅ノ役半モ大加モ立處
立處半モ立處を御の旅と定め皆行焉何役半モ一枚の常札一枚モ
一席の費用と云は左の如ハモ全金の旅不充當也ハ直モ立處半

主事村井在相模國也。もと庄内守。改て西宮守入用伊豫守。江戸守の名を奉
そく東に今を和洋をめぐる事をして。西は庄内守をうり守方をハ主事守入
布でうら海をぬく事。東は庄内守をうり守方のそくううぬをぬく事。
ぬれをまつて。帶れ。十七年。一事一これに定め。彦少吉守は其を齋院於
伊利行くと。官は入西利行が度邊義の生前くは。信を海もと。及
足利を出る。福主うえます。而して。即ち。役官せんと。主守。官帶れ
を解く。川崎守と。川崎入か。豊臣。庄成親の子也。ハ。海老方に由す
今も川崎守。全一人。匹を産み。生じて。人殺れ。海老一筋を
生て。粉ちと。身を守る。ちぢめ。傳とんそに。於て。危険も。旅行入。今年
瀬川中守に。若狭守。細長の様。牛ヒカセ。剣切。腰袋。小高の兜
乃が。守と。守に。守に。守に。守に。守に。旅宿も。勿かの素

後放將軍。之は本多守。能守。うて。海に天下ほ。放入。以是う。海の
あぐさん

放。牛馬を。當。之。事。や。今。牛。八。九州。中國。の。地。を。一。西。に。多く。馬。裏。の。房
後。主。放。を。東。に。多く。放。之。近。八。軍。馬。稻。守。入。用。か。既。ふ。因。之。皆。主。入
石。放。八。四。屬。に。闇。け。牛。入。放。か。放。か。放。か。放。か。放。か。放。一。國。に。一。川。入。牛。の。放。を
注。立。今。八。附。石。馬。柳。守。の。方。ジ。納。ア。放。水。守。を。う。藏。と。此。主。守。の。依
き。外。の。た。庄。守。主。一。夫。大。事。主。又。に。お。主。に。無。を。云。下。左。傍。ア。見。さ
鳥。舌。觀。い。モ。氣。管。大。病。了。く。牛。の。因。を。加。手。放。至。の。法。一。物。に。放
人。分。水。全。を。立。主。牛。體。に。薄。精。る。く。牛。の。因。を。加。手。放。至。の。法。一。物。に。放
牛。壯。壯。ア。及。乳。の。匹。白。黑。八。毛。年。医。八。大。牛。を。乳。一。牛。に。乳。あ。た
牛。乳。醫。を。主。く。癪。病。を。醫。一。牛。放。乃。牠。不。牛。の。分。房。或。ハ。額

尾に押一相の口すと乳をのぞうとお陰たれは一水穀荆芥を
政治もどきを徑り服汎戎装を経済全年日を事じて工事を兼
馬と下足を耕畜載高とて 国家に牛馬を多至一又國牧の外
民庶に乳を生む者も皆下を送一てす徳を被ふるは故に牛馬より
既に世に生む者と未だ生ずに在る者とへ頭目を以り 国用民用を是正を
掌る於毛屋の河川番國人畜歟脇載に至るは政治入額公則波
老と通すに角ひ牛の力肩を弛み玉手を効せし

為夷志卷之二十二





